貢ぎたがり変態ギャルに愛されました

とろろまぐろ

貢ぎたがり変態ギャルに愛されました

デパートの帰り道。

連日猛烈に忙しかった男は久方振りの休日を満喫していた。

何せ、流行病の影響でテレワークを導入せざるを得なくなったため最低限の出社で良しとされるからだ。わざわざ早朝に眠い目をこすりながらリスクのある人混みを掻き分けるなど自殺行為に他ならない、それは頭のお堅い上司も理解していたのだろう。もっとも感染を恐れて保身に走った上のテレワーク導入なのは分かっていたから釈然とはしない。

男はマスクの下で呟く。

「転職するかな」と。

まだ歳は若く、就活でも有利な資格がある。時期が遅ければ折角の資格も腐るし、やりたい仕事の選択肢も狭まる。思い入れも微塵もない残業地獄の会社などに身を置いてたら息を数回しただけで老後が早まってしまう。

物理的に人との適切な距離を空けながら散歩を楽しむ日々。

汚れのない晴れ晴れとした青空を仰ぐのが子供の頃から大好きで、雨の日、とりわけ湿気が苦手だった。潔癖症とまではいかないものの空気清浄機などの換気や湿度調整にこだわる性分であり、肌に触れるような衣類の湿気り具合は気を付けている。

晩ごはんの買い出しを終えて、帰宅ルートである商店街を歩く。

いつもは商店街の八百屋と怪しげな小物店の人だかりが目立つが、流行病の煽りをダイレクトに受けて売上を落とした結果、右も左もシャッターが下りていた。

栄枯盛衰、諸行無常、恐らく活気という再生はもう訪れないのだろう。

不気味なほど静寂な一本道は唾を飲み込む音さえ五月蠅く思わせる。

デパートへの道なんて常に感染リスクを避けるのに必死だったのが、ここではマスクを外すのも大袈裟に身振り手振り動き回るのだって咎められたりしない。不審者ムーブですら見られてないのなら露出まがいの事もできる。

男はそんな品性下劣な思考でウキウキしたが倫理観の欠片は残っている。第一、学生時代からクラスで『弱虫』と揶揄され浮いていたのを証拠に度胸など持ち合わせていない。

AVならきっと……商店街の中心で堂々と嬌声の爆竹を轟かせるのだろう。脳内に広がる妄想は血管まで刺激を伸ばし自然と下半身へ集中していく。人の視線に警戒する必要がない状況なら、膨らみの位置を直さずとも許されるはず。男は尚も歩く。

気配がした。
空気に混ざる誰かの呼吸。刹那、視線がこちらに向いていた。
「あっ」
目が合う。
よりにもよって女性だった。しかも端正な顔立ちで色白、スマホを握る手も清潔で綺麗な青色の瞳。不織布かウレタン製か遠目で判別できないが立体型の黒マスクを着用している。
外国人だろうか、そう考える前に男の足は女性から逃げるように早まっていた。気まずい空気はさっさと退散するに限る。
「待ってよ」
作っていそうな萌え声は地声か、強めな語気で呼び止められる。
振り向くと長身な女性が内股で立っていた。少し離れていたため計れなかったが、バスケでもやっているのかと喫驚する縦幅。当然男よりも大きく、対峙すれは熊と人間のような構図。今にも食いかかりそうな威圧感を放っている。
悪い事は一切していない。ただ一瞥しただけ。そう心に言い聞かせた。
「はい……」
「あっ、ふーん。やっぱりお兄さん、いつもここ通ってるお兄さんだ」

見下ろしながらニタニタと不敵に笑う。二メートルに迫る豊満な身体とアメリカンスクール風の裾を結んだ白シャツに豹柄のブラがはだけている。弱い風に煽られても全開になる極小スカート、そして中身の赤いレースの下着が視線を誘導してきた。
全ての部位に嫌でも注目してしまう。
「胸めちゃくちゃ大きいっしょ？　百センチ以上あるよ～。揉みたい？」
「え！？」
「動揺かわいい～♡」
肉食系の迫り方。わずかな視線の向きを感知して瞬く間に距離を詰めてくる。
きらりとネックレスが光を反射した。小粒のエメラルドと金髪、そして際ど過ぎる衣装が背丈の差を生かして通せんぼ。歩みを封じられた男は商店街の中心で捕まる。
直感的にというか、そのまんま売春か勧誘の類いだと察知してハッキリ断る気でいた。
「どぉ？　よければ～……」
「無理です。僕は興味ないんで！」
声を少し張り上げて突っぱねる。
女性は鳩が豆鉄砲を食らったような顔になり、しばし沈黙が流れた。
そして沈黙を破ったのは女性だった。

慰めていると、腹部の異音が止んでようやく落ち着きを取り戻した。
「お兄さん……ありがと……」
「すまん、やり過ぎた」
「大丈夫。チン毛が変なとこ張りついて、ぺっ、ぺっ、うげぇほら金玉に生えてた縮れ毛〜。にひひ」
数センチくらいの歪な毛を喉から吐き出す。
その場で上手い言葉が紡ぎ出せず、男は軽く頷くだけ。女の子の胃酸に自分の陰毛が消化されかけてた事実に興奮しないわけがなかった。
「うっ、ゲフッ、ゲゥゥ！」
桃羽は身を捩らせて焦る。詰まった物を出すために胸を叩く。
野太い声音になりながら精液と酷似した臭気を放って悶絶した。
「ゴゴゴッップッ！！　くっっっせ！！　胃の中ザーメン臭に染まりきって、ゲプ、ゲプ、ゲプッ！　止まら、ゲエェェエェッッ♡♡　グルルゥゥゥ……かはっ♡♡」
破裂寸前な胃の精液臭を排出しながら男の手を握る。求めているように向けた表情には涙が流れており、濡れた髪の毛が頬やおでこにくっついていた。
曖気の刺激臭に混ざってアンモニアと似た臭いが鼻奥をくすぐる。